俵万智歌集『未来のサイズ』

佐佐木頼綱

著者の第六歌集。Ⅰ章はコロナ禍での生活を、Ⅱ章以降は子育や引っ越しといった生活詠を中心に社会詠、相聞、挽歌など様々な歌が時系列で並んでいる。歌集タイトルとなった歌は第Ⅲ章「未来のサイズ」にある。息子の中学校入学式での歌。

・制服は未来のサイズ入学のどの子もどの子も未来着ている

成長を見越して買った大きめの制服を着て並んでいる中学生たち。「どの子どの子も」と視点を散らし「未来を着ている」と明るい結句に着地し、ピカピカの制服を着た中学生たちのまばゆさが伝わってくる。

・ふいうちでくる涙あり小学生下校の群れとすれ違うとき

という歌も並んでおり子供と離れる切なさが前に出てくるのだが、その時々に

・相部屋の感想聞けば「鼻くそがほじれないんだ。鼻くそたまる」

と親心をやすやすと越える中学男子の素朴さ、たくましさ、正直さが現れて笑わされたり、胸を暖かくされながら読みすすめる。少年の存在が大きな軸をなしていて、

・ほめかたが進化しており「カフェ飯か―オレにはもったいないレベルだな」

・手伝ってくれる息子がいることの幸せ包む餃子の時間

など現代の少年らしい言葉や、母親の前向きな姿勢の歌が心地が良い。食卓は俵の大きな舞台なのだろう。

第Ⅰ章では丁寧に、前向きにwithコロナの未来が描かれる。

・トランプの絵札のように集まって我ら画面に密を楽しむ

・かんたんに想像していた来年もこの番組に出ている我を

・夏らしいことしてみたき夏が来てカフェフラペチーノ丁寧に飲む

短歌でしか掬えぬ物の重要性を度々書いてきた著者。これまでと同様に、そして不確実性を認識してより深く、今を愛そうとしているのだろう。

また、社会詠もこの歌集の一つのテーマだろう。「未来」が付されたもう一つのタイトルでⅡ章の「未来を汚す」がある。セウォル号沈没事件の連作である。

・安全じゃないことうすうすわかってた船に子どもを乗せる前から

・子どもらを助けていたら沈むから下着姿で逃げる船長

・異様なる広告宣伝費はありて安全よりも安全神話

・ふいにくる死者のまなざしあの海とつながっている今ここの海

・殺人の湾曲表現「人災」は自然のせいにできないときの

・国、首相、社長、完了見殺しの方法ばかり歴史に学ぶ

・シルエット海辺に浮かび原発は出航しない豪華客船

俵万智の歌らしくない歌が並ぶ。メディア露出の高い著者にとって、社会詠を発表する事は気軽な行為ではないだろう。歌集に収録した理由は亡くなった子どもたちへの心寄せか、この人災に未来を汚す原型を見たからか。突きつけられるように読んだ。